

福岡教育大学 ○長山芳子 西町祥子

【目的】被服の洗濯・乾燥後の取り込み、着用、収納・保管などを行う場合、布の乾燥状態を手触りによって判断する場合が多い。一方、洗濯およびすすぎ過程において、汚れは除去されるが、同時に布の損傷も生じていることが認められている。この損傷や性状変化が、乾燥状態の判断すなわち手触りによる布の乾湿感に及ぼす影響について、官能検査法を用い検討した。

【方法】試験布はブロード、天竺、ネルの綿3種類とした。Terg-0tometer洗浄機で浴温度40°C、浴比1:20、0~100時間洗濯後、アイロン仕上げをした。さらに温度20°C、水分率8段階に調湿し用いた。試験室は室温20°C、湿度65%RHとした。

被検者は学生男女各20名とし、椅座位において視覚の影響を取り除いたのち官能検査を行った。試験布をきき手で触り、乾湿感は4段階評定（乾いている、やや湿っている、かなり湿っている、濡れている）を口頭で回答した。さらに、その布が洗濯物であれば取り込むか否かも回答した。提示する布地の種類、水分率および洗濯時間の順序は被検者間でランダムとした。

【結果】いずれの場合も、布の水分率増加とともに「乾いている」評定は減少し、高水分率では「濡れている」評定が出現した。洗濯時間にかかわらず、ネルの湿り気評定は、ブロードおよび天竺よりも低い傾向を示した。長時間洗濯布の湿り気評定は、未洗濯布よりも低下する傾向を示した。